
mustLIVE -何があっても、絶対に-

又里ゆたり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m u s t L I V E - 何があっても、絶対に -

【Nコード】

N 3 7 4 2 B A

【作者名】

叉里ゆたり

【あらすじ】

『今』を平和に過ごしている主人公・杜野 遊里。

しかし、彼には誰にも話せない秘密を隠し持っていた。

学校で「いじめ」に逢っている紅髪の少女・五十嵐 弥風との出逢いが、彼の世界を変えていく。

注意：過去に他サイト等で投稿した小説にて、登場人物の名前が一部被っております。ご容赦ください。

人気者〃嫌われ者

部活で良い汗をかいて、帰ろうとしたら教室に明日締め切りの課題を忘れた。

俺は数学の成績が悪い。今まで課題提出で辛うじて単位を稼いでいたようなものだ。

早くしないと学校が閉まってしまう。本来なら生徒は帰らなければいけない時間。急ぎつつも大嫌いな数学の為にしぶしぶ4階の教室へと足を運んだ。

息を切らして着いた教室。クラスメイトの机の置き勉強が目立つ。そんな事より、早く課題を持って帰らなければ。あーあ、数学なんて社会に出て役に立つのかよ。

コツ、コツ。

「……？」

これは誰かの足音。先生だったらまずい。ばれないようにそっと教室のドアを開けてみた。

そこで、俺は全てを奪われる感覚を味わった。

目の前の、綺麗な紅の髪をした謎の少女に。

m u s t L I V E - 何があっても、絶対に -

ピンポンパンポーン、と学内放送のチャイムが鳴る。

『体育科2年、杜野^{もりの}。至急数学担当の佐藤のところまで！。』

「げっ、まじかよ…あれでも出来るところはやったのに…」

「遊里^{ゆつり}、お前の数学はやったのに入らねえって。素直に誰かのをカンニングすれば良かったのによお。」

「残念、俺はお前とは違って基本のルールは突き通してるんでね。」

「お前…そういうところはしっかりしてんのな…」

俺は、杜野^{もりの} 遊里^{ゆり}。高校2年の16歳。生粋の体育会系男子だ。

昔、名前と見た目からよく女の子と間違われた。

恥ずかしい話だがファーストキスが4歳。しかも相手は男で、無理矢理キスされたいという最低な思い出がある。

体育会系なだけあつてある程度は体格に救われているが、昔の名残なのが見る人によつては高校生になった今も女に見えなくもないと言われることもしばしば。

俺はゲイでも女でもない。普通に好みは女の子。健全な男だつての。

先程呼び出しをくらつた原因の数学は、入学以降学年最下位の座を守り続けている。

だがその分陸上ではそれなりの成績を収めている。

気がつけば地元では有名になつていたらしく、知らない女の子の集団にストーカーされていたなんて事も。

辛いな事に、最近よく話題になつていいるいじめなどの経験は無い。さっきの奴みたいオープンな会話が出来る友達が沢山いる。『今は、表向きは幸せだ。』

でも、俺には誰にも言えない隠し事がある。
この隠し事がばれたら、きっと俺は…

今まで築いた『全て』を失う事になる。

「よお、『リストバンド風雲児』！今日も絶好調だな！」

部活中に時々突然現れる、背の高い金髪の先輩。名字は…なんか2つの単語を掛け合わせた感じの人。

俺の耳元で部活仲間の先輩が喋る。

「また来たよ、駒木川^{こまきがわ}。あいつに捕まると厄介だから、あっち行こうぜ。」

先輩に言われるがままに、こまみがわさん（だっけか？）から離れる俺達。

すると、彼（既に名字を忘れた）は不機嫌そうに近くに捨ててあった空き缶を蹴って、グラウンドから去って行った。

「うつわー、危なかったな。あいつ、最近杜野に目をつけてる感じだから気をつけろよ。」

「……」

「いつその事、いつも左腕に着けてるリストバンドはずしちゃえば

？」

……それは、絶対に出来ない。絶対に。

俺は、あの先輩が来るたびに疑問に思う事がある。

さっきあの先輩が言っていた『リストバンド風雲児』っていうのは、テレビ中継があった時に、地元の某ローカル番組が勝手に付けた俺のキャッチフレーズだ。つまり、そのローカル番組を見ている人にしか分からない呼び名だ。

俺が陸上競技で有名になってから、あの先輩は頻繁にやってくるようになった。

きっと、あの先輩も陸上に興味があるのだろう。初めてキャッチフレーズで呼ばれた時、俺の活躍を見てくれていたんだと、正直嬉しかった。是非とも話してみたいと思った。

でも何故か、周りがそれを許してくれない。

「あの、先輩！ひとつ聞きたいのですが…」

「なんだ？杜野が質問なんて珍しいな。」

「どうして、さっき来た先輩が危険なんですか？」

「さっき来た先輩…ああ、駒木川ね！」

先輩は、重い話題にも関わらず、何処となく楽しそうに話を進めた。

「あいつ、1年の時に女の子相手に暴力事件起こしたんだぜ。マジで常識無い奴だよな！」

血濡れ貞子と偽りの人気者

昼休み。俺は席でひとり、もやもやしていた。

『女の子相手に暴力事件起こしたんだぜ。』

『マジで常識無い奴だよな！』

「おい、遊里！」

「……………」

「遊里！おい！」

パン！と手を叩く音。

「…何？」

友人は息を切らして興奮している。なんなんだ。

「俺さあ、遂にこの目で見ちまったよ！血濡れ貞子！」

『血濡れ貞子』は、話を聞く限り、他のクラスにいる幽霊らしい。俺達が所属する体育科は、他のクラスと校舎が離れているから、滅多に別のクラスに行く機会などない。

そもそも俺は幽霊の類などは信じないタイプ。だから今までの友人の話はスルーしてきたが、実際に見たというのなら話は別になってくる。

「へえ…本当に幽霊っているのか？」

「本当にいたんだって！血濡れ貞子！ほら来た来た！」

幽霊が来たなんて、普通は大惨事。そんな事にも関わらず、楽しそうに教室のドアを覗く友人。

クラス内で話題になっているらしく、女子が集団で「お化けだ！」

「マジ怖ーい！」と話のネタにしている様子。

幽霊ってそんな簡単に見えるもんか？

友人の後ろから、俺も初めて血濡れ貞子をこの目で拝む事になる。

（嘘だろ…？）

彼女を見るのは、初めてじゃない。

風に揺れる紅い艶のある長髪。

「きゃー！」

「本物の血濡れ貞子だああ！早く隠れないと殺されちゃうかも！」

間違いない。数学の課題を取りに行った時にすれ違った、綺麗な紅い髪が印象的な、あの少女だ。

この時、俺は初めて『血濡れ貞子』の真実を知った。そして、誰にでも分かる一つの答えに辿り着いた。

放課後。「数学の補習がある」とそれらしい理由で、初めて部活をさぼった。

部活をさぼってでも、どうしても知りたい事があった。

時間は午後6時。この時間は部活動のグラウンド使用のみが許可されていて、数学の課題を取りにいった時と同様に生徒が入るのは特

別な理由が無い限り許可されていない。

勿論数学の補習なんて真っ赤な嘘。本来の目的はまた別だ。

……コツ、コツ。

来た！この音だ！俺は勢い良くドアを開けた。

教室からすぐ見える距離にいた、紅い髪の少女。

少女は俺に気付くと、こちらに鋭い視線を向けてきた。不思議な事に、怖さを感じない。

「びつくりさせてごめん。聞きたい事があるんだ。」

「……………杜野…遊里か。」

初めて聞いた少女の声は、綺麗な髪に劣らず、透き通った声だった。

「あの…嫌かもしれないけど、血濡れ貞子って…」

少女は一言、

「昼休みに知った筈だ、私の事だと。」

「どうして、みんなは君にあんな酷い事を言うんだ？どう考えてもいじめだろ、あれは。」

素直な疑問をぶつけると、少女は一瞬驚いた表情を見せた。本当に一瞬だった。

「……お前は、私が怖くないのか？」

「いや、全然。」

「……変わった奴だな。」

なんだって？俺は（秘密にしている事を抜かせば）そんなに変わった事はしていない。

どっちかと言えば、変わっているのはそっちの方だ。女の子なのに、まるでアニメや映画でかっこいいタイプの女性みたいな話し方をして。

「髪、だ。」

「……え？」

「私は生まれつきで、この通り血のような紅色の髪。両親は、気味悪がって私を捨てた。」

「……！」

ひどい。ひどすぎる。こんな事が現実にあっているのか？

声を掛けたくても、言葉が出ない。何と云えばいいのかわからない。

「同じ赤毛でも、何処かの物語のような魅力も、明るさも、仲間も、未来も私には無い。」

「そんな……」

身動きを取る事が出来ない俺に、少女は言い放った。

「もっとも、平和に暮らしてきたお前には、分からないだろうがな。」

『平和』？

そんなの、俺にとっても今だけのもの。

俺にだって、誰にも言っではいけない秘密があるんだ。

「分かったよ。君には見せてあげるよ。」

無意識に口に出した言葉と、左腕のリストバンドに向かって伸びる自分の右手。

この校舎には、俺と少女しか残っていない。

だから、この事実を新たに知るのは、少女ひとりだけ。

リストバンドの下の皮膚には、血よりも赤い、所謂原色の赤を背景に、紫色の斑点が今も動き回っては混ざり合って…決して人にあるってはないもの。

リストバンドの下に隠れるものを見て、無表情を貫いていた少女も目を見開いている。

「ほら、気持ち悪いだろ？これをみんなに知られたら、俺も終わるだ。」

そこで少女が、思わぬ一言。

「痛くないのか？」

ためらい無く、見るだけでおぞましい左腕に両手で触れた少女。

次は俺が戸惑う。なんで、何で逃げない。

「どうしてだよ…これを見ても、気持ち悪いって、怖いって思わないのかよ？」

「全然だな。それより、私の質問に答えろ。」

いつの間にか、立場が逆転している。何だこれ。

「まあね。常に痛いよ。中学の時に事故に逢って、それからこいつが出来たんだ。誰にも知られたくなくて、リストバンドでずっと隠してたんだ。」

でも、今、この場で不思議な事が起きている。

少女が左腕に触れてから、常にかけていた鈍い痛みが治まっているのだ。

「そうか…それを、私なんかに見せて良かったのか？」

「ははは、何で見たんだろうな。自分でもわからないや。」

俺は、薄々感じていた。

この人なら、全てをさらけ出せると。

「五十嵐 いがらし 弥風 みなぎ…」

「…ん？」

「私の名前だ。私だけ一方的にお前の名前を知ってても意味が無いだろう。」

「ありがと。よろしくな、弥風！」

「早々下の名前で呼ぶのか…」

「それと、俺の名前は『お前』じゃないぜ。名前、知ってるんだか

ら気軽に呼んでくれよな。」

「…分かった。」

俺・杜野 遊里と、

紅髪の少女・五十嵐 弥凧の出会い。

すべては、ここから始まった。

印象に捕われるな。

「よっ、弥風！おまたせ！」

「別に…待つてはいないが。」

あれから、部活終わりの校舎で弥風と話す事が日課になった。誰もいない校舎。まるでいけない事をしているどっかのカップルみたいだ。（実際いけない事だが。）

「そっといえば、弥風って何処のクラスなんだ？」

「…家政科だ。」

これは意外。てっきりエリート系の学科（実際にそんな感じの特別な科がある）だと思った。

「おっ、料理とか出来るのか？今度俺に作ってくれよ！」

「…機会があつたらな。」

あれ？てつきり断られるかと思つたら案外ノリが良いな。そんな事本人に言ったら怒られそうだが。

「なあ、弥風。どうして毎日ここにいるんだ？」

「……」

黙り込む弥風。流石にこれは言えないってことか。

わざわざ家政科の校舎から離れた体育科の方に来るほどなんだから、それなりの理由があるのだろうけれど。

「…いつか、わかる時が来る。」

何なんだろうか、一体。

どうにか人の目をかいくぐって、無事学校から脱出成功！

…かと思われたが、今日はそうもいかなかったようだ。

「よっ、張り込んでた甲斐があつたぜ、『リストバンド風雲児』！」

部活の時に、幾度も顔を出して来たあの金髪先輩だ。張り込み
って事は、俺を待ってたってことか…

「あ、どうも。」

「お？今日は逃げないのか？」

「…勝手に部活の先輩が逃がしてるだけですよ。」

「ああ、奴ね。あいつ表向きだけ良い顔してうざったらしいんだよな！」

実際、否定はできない。いつも先輩から俺を遠ざけようとする部活仲間の先輩は、爽やか系に見せかけて、実は相当な腹黒だと俺も踏んでいる。

表向きだけ良い顔って言うたら、自分もそうなんだけど……

「俺は駒木川 恒哉^{こまきがわ じょうざ}ってんだ。名字が難しい分、下の名前が単純でいいだろ？」

「杜野です。杜野 遊里といます。」

「へえ、あれでユウリって読むのか！」

「他になんて読むんですか。」

「ユリ、とか？」

「……よく言われます。」

「普通に遊里って呼ぶわ。ところで……」

先輩は表情をにやつかせて、俺の顔をのぞいてくる。なんだなんだ。

「遊里さ、最近あの美人な女の子と仲良いみたいじゃないの。」

げっ、もしかして…いや、クラスの女子と交流はあるし、そのまま思った事を素直に言ったら墓穴を掘るだけだ。

「…家政科の弥風ちゃんだったっけかなー。」

「えっ、あつ……」

「よっしゃ、図星ってやつか？」

最悪だ。悔しいけど大正解。

俺が弥風と話していたのを見られてたのか。これはかなりまずいんじゃないか。

「あの子、前に体育科の方に来て大騒ぎになっただけらしいな。」

その後かは知らないけど、弥風ちゃんが屋上の隅っこで、ひとりで泣いてたぜ。」

「え……」

言う方は簡単、言われる方は傷つく。

それはポーカーフエイスの弥風だって一緒だ。弥風だって、一人の『人間』なんだ。

「屋上は全部俺の縄張りだからな。一回だけじゃねえ。弥風ちゃん
は気づかれてないと思ってるだろうけど、何度も屋上に泣きに来て
るぜ。」

前、思い切って声をかけたら凄い形相で睨んできて、どっかに逃げ
てったけど。」

だからさ、遊里が元気づけてやれよ。だつてさ。

弥風の心の傷は、完全に癒えることなんてないだろうに。

「恒哉先輩、なんで弥風の名前まで知ってるんですか？」

「あれ？そつか、言ってなかったな。」

俺も家政科だぜ。つまりは同じ学科の先輩だし、毎日弥風ちゃんを
見てるって事！

ま、毎日全校舎を見回りしてる俺様なら、お前らのリア充っぷり
もお見通しってことよー！」

ええええええ！！？

急展開・超展開

「遊里！明日、大会らしいな！」

「…はい、頑張つてきます。」

「よし、俺は屋上から念を送つてるぜ。頑張れよ風雲児！」

恒哉先輩の愛（？）がこもった拳が胸に当たる。痛い…

この時、大会でこれまでにない大変な事が起きるなど誰が予想した
だろうか。

俺は長距離走の種目に出ている。

どこでスパートをかけるかが勝負の分かれ目。

集中力を研ぎ澄ませ。目の前を走る事だけ考えろ。

『決勝進出の選手は準備をお願い致します。』

『位置について、用意！』

バンっ！！という音と同時に自分のペースで駆け出す。

競技が終盤に近づいた時、事件は起きた。

スパートをかけ、一気に群を追い抜こうとした時だった。

前についていた選手が、突然転倒。

俺もそいつに巻き込まれて、同時に転倒した。

ただ転んだだけなら問題無い。

むしろ重大なのは、転んだことじゃない。

「……………!!!」

転倒で滑ったことによって、今まで秘密の隠し役をリストバンドが、肘のあたりまでずれていた。

地元のテレビ局も来ている中、あの見られては行けないものを、一瞬むき出しにしまった。

慌ててリストバンドを戻し、転んだ分の遅れを何とか取り戻した。

「長距離5000m 3位 紀乃花高校 杜野 遊里。
きのはな」

賞状を片手に、仲間の集まる場所へと向かう。
気分は、晴れないまま。

「やつぱすげえよお前。大事なところで転んでも3位まで巻き返すんだもんな。」

「…本当は1位を取りたかったです。」

…腕の事には触れないでくれ。そればかりを願いつづけた。

「じゃあ、今日はゆっくり休めよ。お疲れさん。」

この地点で事態は收拾したと、信じたかった。

帰宅。風呂に入って、家族と夕飯。

「遊、今日はお疲れ。転んだところからの3位なんてすごいじゃない！」

目の前には、母さんの自慢の手料理。

「母さん、テレビ中継見てたろ？俺、どんな感じに映ってた？」

「そりゃもう、転んだところが拡大で映ったわよ！顔が映らなくて良かったわね。」

俺は安堵のため息をついた。

良かった。幸いカメラは背中側を映していたらしい。

「ごちそうさま。今日も美味しかった。」

さてと、今日もメールチェックと。

自室でパソコンを立ち上げ、iGoogleを開く。

マウスを動かす手が、ぴたりと止まる。

「何だこれ……」

俺は自分の目を疑った。

[illegible]

Google 急上昇ワード

1・血濡れ貞子

ウェブ検索結果

【画像あり】血濡れ貞子の呪いにかかったイケメン高校生【呪】

血濡れ貞子とは？

2・杜野遊里

ウェブ検索結果

高校生陸上競技。○県大会5000m男子3位・杜野選手の腕に、
キモい模様があると話題に【検証画像付き】

リストバンド風雲児がマジで人間じゃなかった件
wwwwwwワロタ

- - - - -
- - - - -
- - - - -

なんだよ、急上昇ワードの1位と2位が俺と弥風ってどういふこと
だよ。

なんで俺の事なのに、弥風まで巻き込まれてるんだよ。

なんでなんでなんでなんで。

恐る恐る、リンクからページを開く。全部が某大型掲示板のものだ。

実は、テレビ中継でほんの数秒だが転んだ瞬間の腕が映り込んでいたらしい。

この某大型掲示板の奴らは、その一瞬も見逃してはくれなかった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

1：名無しくん 20××/09/08 18：32

こいつの腕どうなってんのwww【検証画像・動画あり】

59：名無しくん 20××/09/08 18：33

<<1

うわっ、これはガチでキモいwww

104：名無しくん 20××/09/08 18：33

<<1

刺青じゃねーのこれ

150：名無しくん 20××/09/08 18：34

<<104

こんなセンス悪い刺青なんかねえよ。

<<1の動画を見る。よく見ると腕の模様が動いてるだろ

192：名無しくん 20××/09/08 18：35

リストバンド風雲児www

そりゃリストバンド取れないわなwwwワロタwww

225：名無しくん 20××/09/08 18：36

<<150

マジだ。。。なんだこれ呪いか？

330：名無しくん 20××/09/08 18：39

<<225

俺そいつと同じクラスだけど、もしかして血濡れ貞子の仕業かもな

342：名無しくん 20××/09/08 18：40

<<330

日本語でおk

391：名無しくん 20××/09/08 18：40

<<330

k w s k

420：名無しくん 20××/09/08 18：41

<<330

リアル貞子???

573：名無しくん 20××/09/08 18：41

<<330だが

他のクラスに、地毛が血みたいな色の女子がいてさ

そいつが血濡れ貞子って言われてただけだ、俺らのクラスは他のクラスと離れてるから滅多に会えない奴なんだ。

1週間くらい前、突然俺らの学科の校舎に血濡れ貞子が現れて教室中大パニックになった

606：名無しくん 20××/09/08 18：43

実際髪が赤い女ってただけだろ？そこらじゅうで髪を赤に染めてる奴いるだろw

744：名無しくん 20××/09/08 18：44
<<606

俺も同じ学校だが、実際に見てみないとわからない。あの色はガチ。親いなくて一人暮らしらしい。

家政科なんだけど、一人でいつも黙々と作業してて、

その姿が人を殺した後の貞子にしか見えなくて気持ち悪いwww
マジで幽霊なんじゃねーのwww

血濡れ貞子の画像1枚持つてるから晒すわw

勿論編集はしてないお

ttp://xxxxxxxxxxxx.jpg

750：名無しくん 20××/09/08 18：46
<<744

怖www

759：名無しくん 20××/09/08 18：48
<<744

俺らの名が知れ渡ってしまった。

この腕は弥風はまったく無関係だ。一番の被害者は弥風だ。

その前に…明日、学校に行ったら俺はどうなってしまうのだろうか。

ご丁寧に俺のクラスの奴から情報漏洩されてるし、話題が広がるのは確実だ。

弥風…これを知ったら泣いてしまっただろうな。

某所にて。

「んっふっふ」世界の反乱因子、見つけたっ！」

暗闇の中で、パソコンで何やら情報を見ている謎の少女。

パソコン画面には、例の大型掲示板の文字がずらり。

「遊里くんかぁ…なかなかイケメン！この子が化身になるなんて勿体ないわ」

いや、もしかしたら化身もイケメンなのかも…

あげは、いつその事遊里くんのお嫁さんになりたいーい！ーい！」

「あげは」と名乗る少女の後ろには、ソファアに座り、今時では珍しい煙管を吸う青年。

「おい、あげは。反乱因子は真っ先に排除すべきだろう。そいつは危険なんだ。」

「リーダー、つれない！……あ、そうだ！ーい！」

あげはが、手元のペンをくるくる回しながら席を立つ。

「化身になる前に、この遊里くんを手なずけてこっちのものにする

「...のせいかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3742ba/>

mustLIVE -何があっても、絶対に-

2012年1月10日04時45分発行